



上の写真は、大学祭での子ども発達学科音楽企画

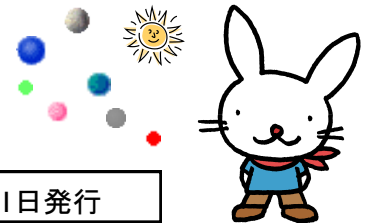
この号の主な内容

第58回福祉大祭	
・心理学体験企画	1
・キャリアガイダンス	
・教育実習・事前指導開始	2
・環境ふおーらむ	
・施設実習	
・特別支援教育実習	3
・24時間TVドミノ	
・教員紹介	
・ゼミでの畑作り	4

We Love 福祉大

— 日本福祉大学 子ども発達学部ニュースレター —

第6号 2010年12月1日発行



「第58回福祉大祭」の実行委員をやりました

今年の福祉大学祭は11月7日、8日に「今、ここで」をテーマに開催しました。私たち福祉大学祭実行委員会は4月から企画創案、準備を始めてきました。最初のころは仕事の仕方が分からず迷っていましたが、先輩方が前年度を参考にした仕事を教えてくれ一人で仕事をできるようになりました。夏休みが明けると「いよいよ」という雰囲気が流れてきました。私たち福祉大学祭実行委員だけでなく、ボランティアサークルなども準備を始め学校全体で「第58回福祉大学祭」が進められました。当日、私たち実行委員は準備、本番、片付けを含め3日間実行委員全員で泊まり込みをしていました。両日とも晴



天に恵まれ、たくさんの来場者の方で賑わいました。特に2日目は移動動物園企画が行われたくさんの子供たちが来てくれました。

ゲスト企画のMiChilによるミュージックライブも盛り上がり、福祉大学祭は無事成功につながりました。大学祭当日までは長く、準備期間、本番ともに大変でしたが「第58回福祉大学祭」に実行委員として関わったことをうれしく思います。



うえしま さき
上嶋 咲紀(子ども発達学科 保育専修 1年)

心理臨床学科企画

11月6日のオープンキャンパスでは3つの心理学体験企画が開催されました。高校生だけでなく在学生や大学祭に訪れた一般の方にも参加していただき、例年通り好評の企画となりました。人形やおもちゃなどを使いながら小さな砂場に自分を表現する「箱庭体験」では、できあがった箱庭の風景にこころの深さを感じてもらえたようです。

また、有名な性格検査である「エゴグラム」では、検査結果から「新たな自分を発見できた！」との声が多く聞かれました。いつか先輩たちのように検査結果を解釈できるようになりたい、と思った高校生もいたようです。さらに「鏡映描写」では、鏡に映った逆さまの世界で、思い通りに身体を動かすことの難しさを体験してもらいました。少しの練習でも逆さまの世界に順応していくような、人間のすごさも実感してもらえたのではないのでしょうか。

心理学体験

いずれの企画も心理臨床学科の授業(心理学実験・実習)でおなじみの内容ですが、高校生たちにも一足早く、そのエッセンスを楽しみながら体験してもらうことができたようです。お手伝いいただいた学生のみなさんもお疲れさまでした。

こだいら ひでし
小平 英志(心理臨床学科 准教授)



あなたたちの生きる道とは？

—心理臨床学科3年生キャリアガイダンス—

心理臨床学科3年生対象のキャリアガイダンスを文化ホールで7月15日に実施しました。池谷学科長よりガイダンスの目的および「働くことと働く権利」についてお話いただいた後、学科キャリア担当教員より心理臨床学科の進路について参考データをもとに説明を行い、その後進路別にブースに分かれて説明・相談会を行いました。「臨床心理士・進学」、「中高教員・特別支援学校教員」、「一般企業」、「施設・保育」、「その他なんでも相談」の5つの領域それぞれに活発な相談会となりました。また「公務員」ガイダンスは別の日程で先輩の話を聞く会として実施され、有意義な会となりました。10月からは本格的な就職活動がスタートしました。本学科が発足して以来、初めての「就活」です。ガイダンス当日に行ったアンケート結果からは、3年生が不安で一杯になっていることがわかります。一人

一人満足のいく進路決定ができるように、キャリア開発課と連携しながら学科全体が一丸となって具体的な支援に取り組んでいかなければなりません。



よしはら ちえこ

吉原 智恵子(心理臨床学科 准教授)

教育実習の事前指導が始まりました

10月より3年生の教育実習の事前指導が始まりました。初等の教育実習は、4年生の6月に予定されていますが、その事前のための指導が開始されました。

主な内容は、教師の力量をつけるために「模擬授業」が計画されています。学生が12のグループに別れて、教師役のグループと生徒役のグループに別れます。特徴は、子ども発達の



初等の教師が参加して、それぞれの教材を指定し、同じ教材をもとに二つのグループが25分の授業をしていきます。そして、比較して授業分析を行い批判検討していくので厳しいものになっていきます。

教科も、国語、社会、理科、音楽、体育、道徳とあります。3年生までのこれまでの各教科の研究と指導法がどれだけ身につけているのか問われます。学生は、グループで何回も集まり指導案を作成し、授業のための準備をします。そして、模擬授業を行います。司会も担当の学生が行い、指導法などに率直な意見が出され、授業者とグループの力量が試されます。

仕上げとして、各自のレポートの提出もあり、教育実習のへ向けて本格的にスタートしていくこととなります。

こばやし しんじ

小林 信次(子ども発達学科 教授)

環境ふぉーらむ2010に参加して

10月2日に、南知多ビーチランドで行われた「環境ふぉーらむ2010」に東内ゼミで参加しました。子ども発達学部の学生だけでなく、経済学部の学生や地域の方々もたくさん参加していました。

まず、南知多ビーチランド館長の長谷川修平さんの講演を聞きました。長谷川館長のお話の中で、私が最も印象に残っているのは、ウミガメの赤ちゃんの話です。ウミガメは浜辺で産卵をし、その後産まれてきます。本来なら、明るい海を目指していくはずのウミガメの赤ちゃんですが、浜辺にあるいくつかの外灯の灯りを目指していってしまい、そのまま死んでしまうことが増

えているそうです。人間が住みやすいように作りかえたことによって、ウミガメは犠牲になっているということが、とても悲しいと思いました。ウミガメの被害をこれ以上出さないために、外灯の数を減らすことができればいいと思いました。

日本福祉大学教授の磯部作先生の講演では、主に伊勢湾についてのお話を聞きました。今まで伊勢湾には多くのクジラが目撃されていることを聞いて、身近な海でクジラを見ることができると驚きました。しかし、何頭ものクジラが座礁しているという事実も知りました。実際に、クジラが座礁した様子をスライドで見て、体中に傷を負って座礁する姿は、言葉にできない悲しいものでした。伊勢湾に住むクジラやその他の生物を守るために、何ができるのか考えていきたいと思いました。

講演のあとに、大水槽バックヤードツアーに参加しました。普段、見る事ができないビーチランドの裏側を見せていただき、とてもいい経験になりました。半日を通して、海に住む生物が身近に感じられ、海の環境について深く考えさせられました。

いわま

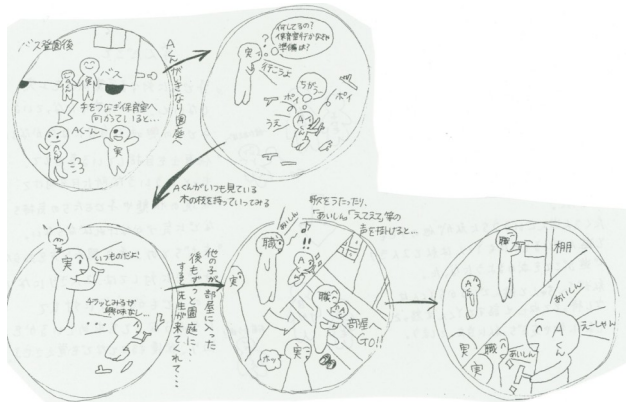
岩間 あゆみ(子ども発達学科 保育専修 2年)



知的障害児通園施設に実習に行きました

私は、今年の6月、知的障害児通園施設に行きました。知的障害児という名前だけで施設を思い浮かべると自閉症児が多いように初めは思っていたのですが、実習の事前学習や実際に施設に行くことと違うことを実感しました。例えばダウン症と知的障害を持つ子どもたちがいます。

保育園での実習は発達の比較も行いやすかったのですが、今回は障害児だけであり、自分の中でしっかりと発達



が理解できていないとどれだけ発達が遅れているのかなどを理解するのはとても難しいと思いました。

実習にあたっては“なぜ？”という疑問を持つということがとても大切です。一日の終わりに反省会を行うのですが、日常の中で疑問に思うことがないとせっかく質問をする機会があるのに無駄になってしまうからです。日常の小さな事から施設に関してのことなど直接現場の声が聞けるのだからどんなことでも疑問に思ったらその場でメモをしておいていつでも聞けるようにしておくことが大切だと思いました。

実習は記録など大変ですが、子どもと接する中で今まで学んできた自分の知識を総動員してどのような支援をしていくかということを考えていったり、さらに学びを深め、新たな疑問を抱いていくという貴重な経験がたくさん出来ました。保育園より少ない集団のなかで子ども一人ひとりに目を向けて子どもの変化に気づいた時はすごく嬉しかったです！これから実習に行く皆さんも自分自身の力で有意義な実習を行ってください！fight！

もんでん ちひろ

門田 千緩(子ども発達学科 保育専修 3年)

特別支援学校教育実習に向けて

「学校の先生になりたい」、「自分もあんな先生・・・」、「将来は中学校の先生になるんだ」などと考えている人はいません。

特別支援学校、今はこのように言っていますが、盲学校・聾学校・養護学校など障害のある子どもたちが学んでいる学校のことです。この特別支援学校で先生がしたい、障害のある子どもたちとずっとかかわっていききたい、などと考える人は、基礎免(小、中、高等学校のいずれかの免許状)と特別支援学校の教員免許状が必要です。

もちろん、特別支援学校での教育実習も必要です。小学校や中学校、高等学校はよく分かっていると思いますが、特別支援学校の様子は全く知らないという人がほとん

どです。実習では戸惑いや緊張の連続です。1クラス5、6人ですが、前を見るように言っても見てくれない。何を言ってもほとんど反応がない。勝手に席を立ってしまう子どももいます。まさに悪戦苦闘です。それでも実習から帰ってきた学生さんに感想を尋ねると、一緒に「子どもたちがかわいい、とても楽しかった」と言います。

わずか2週間の実習ですが、子どもたちが大好きになり、「どうしても特別支援学校の先生になりたい」と決意を新たにしている学生さんもたくさんいます。一人でも多くの方が障害児のことをよく理解し、特別支援学校の教員になって欲しいと願っています。

おおわだ たかし

大和田 孝士(心理臨床学科 教授)

24時間テレビのドミノに参加しました

私は今回、ドミノを経験してみて、協力するという事がどれだけ大切かという事を改めて実感することができました。

準備の段階ではどのような仕掛けにするか、ドミノはどのくらい使うのだろうかなど細かいところまで決めたり、一人100個のドミノに画用紙を切った物を貼りつけたりしました。

リハーサルや本番では、風でドミノが倒れないように猛暑の中、窓を全部閉め切ってやったため、暑さで集中力がきれたりしました。集中力がなくなってくるとどうしてもドミノを倒してしまい、また連鎖してみんなが倒してしまったりしました。しかしその時にチームのみんなが文句も言わず協力してやる事ができたので、より仲を深めることが出来たと思います。本番では6時間以上かけて作ったものが15分足らずで終わってしまい、少し悲しく感じましたが、その時間はすごく感動的で思わず鳥肌が立ってしまうような15分間でした。

毎日大変でしたが、本番では成功した達成感や感動を得ることが出来たので、この夏休みをドミノにかけてよかったと思いました。

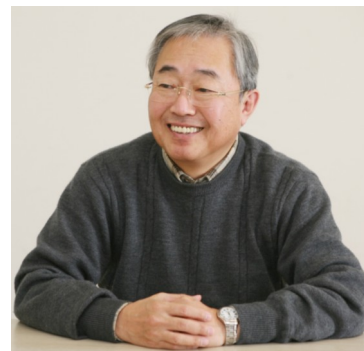
ふかつ さとみ

深津 里美(心理臨床学科 1年)



障害児とそのお母さん方に出会って理学から心理学に専門をシフトしました。その後、精神病院で精神障害者の心理査定と心理療法に携わり、大学に職を得てからは産業カウンセラー、スクールカウンセラー、児童相談所、児童養護施設、少年院等をフィールドに臨床三昧の日々です。大学では即戦力となる臨床心理士を養成することを目指すため、ゼミ生には厳しい臨床現場へボランティアとして定期的に出向くことを勧めています。自分で特定した対象との濃密なかかわり体験を記録し、それを他のゼミ生とともにグループ・スーパービジョンを行って己の限界に直面化する一方で、夢分析・ドリームワークによる「自己探求」を深めることにも挑戦

しています。内なる傷ついていた子どもと出会うことは苦しい作業ですので、楽しくなかったらゼミじゃない！をモットーに雰囲気だけは楽しくしています。ただ学生を可愛がりすぎため学生にとってはありがた迷惑かもしれませんね。



えぐち のりお
江口 昇勇 (心理臨床学科 教授)



保育内容、特に「生活と環境」を担当しています。愛知ではCOP10がありましたので、「環境教育」はこれまで以上に身近な存在になってきたかもしれません。「幼児期」の環境教育も、全国で取り組まれています。しかし何を「ねらい」、何を「経験」すべきか、現場では熱心な議論が続いています。そこでゼミでは、学生たちと幼児期の環境教育にかかわる理論を実践しながら勉強しています。

10月には、学内に畑をつくって、冬野菜を植えました。1月には食育につなげようとワクワクしています。また私自身も勉強中で、先日は新潟県の保育者の方々と合宿しながら、スウェーデン発祥の幼児期における環境教育プログラムである「ムツレ教室」について学んで実践してきました。

幼児期の環境教育プログラムとしては、唯一のもので。今後、環境教育は、より重要なテーマとなってきます。学生のみなさんと一緒に体験しながら、学び続けていこうと思います。

とうない りりこ
東内 瑠里子 (子ども発達学科 准教授)

ゼミでの畑作り 東内ゼミ

私たちのゼミでは、子ども発達学部棟の横に畑を耕し、大根、チンゲンサイ、白菜、カブの栽培を行っています。ここでは、その活動の様子を紹介します。まず5班に分かれ、幼児教育にとって意義のある栽培活動とは何かを話し合い、レポートにまとめ、プレゼンテーションを行いました。私たちの班は、大根を取り上げました。大根を取り上げた理由は、苗を植える時期と収穫する時期が、この時期に適しているためです。そして収穫した後の調理方法が豊富であり、幼児のアイデアを活かした食育活動への展開が期待できるからです。他の班の発表を聞いて、さらにゼミ全体で何を育てたいか考え、また議論を行い栽培する野菜を決定しました。この決定をもとに、栽培に適した苗をそろえる班、大きな石を拾い腐葉土を入れ畑を耕す班、看板を作る班、竹で柵をつくる班に分かれて畑作りを行いました。

私は看板を作る班で看板づくりに取り組みました。看板は、木材で作り、幼児にもわかりやすいように野菜の名前と絵をペイントしました。保育専修で図画工作を担当の守山先生に、看板づくりのアイデアをいただき、みんなで協力して完成させることができました。柵を作る班では、大学の裏山の竹を切りました。1本切るのに30分以上の時間がかかりました。また腐葉土を裏山からトラックで運び込み、畑を耕した班は、半日も時間をかけておこなったようです。



畑作りの最初から、大きな問題が発生しました。子ども発達学部棟の横の土地は、水はけが悪く、雨が降ると何日も水たまりができるということがわかりました。そこで、みんなでアイデアを出し合い、畝を高くするなどの工夫をしました。実家が農家であったり、農業高校を卒業した友だちのアイデアが助けになりました。これからも様々な問題を協力して解決していきたいです。いまから野菜の成長がとても楽しみです。大きく育て、みんなで収穫し、食育活動につなげられたら達成感を味わえると思います。またこの経験を、保育現場に就職していきたいと思っています。

みやもと はな
宮本 華 (子ども発達学科 保育専修 2年)

